

終わりに

子どもの貧困問題は、途に就いたばかりと言えます。これまでも、「低所得問題」「いじめの問題」「不登校の問題」「ひとり親の就労支援」等の対応は、関連するところで取り組まれてきました。しかし、「相対的貧困」といわれるこの課題は、一部で対応すべき問題ではありません。むしろ部局連携でかかわることが求められるのでしょう。

また、子どもの生活や様子に寄り添うのであれば、「子どもの貧困」というテーマは、子ども全体への支援であり、そして家族全体への支援であり、さらに地域ぐるみでの取り組みだと思います。子どもたちと全体的にかかわる中で「相対的貧困」に置かれている子どもたちを発見していくという構図なのだと思います。

とはいえ、子どもの貧困問題を潜在化させてしまうと、これまでと何ら変わりなくなってしまうと思います。子どもが置かれた状況に応じて知恵と工夫と多くの協働で、課題を解決しなければなりません。

今回福島県からの委託を受け、調査に取り組みましたが、十分な成果を報告できなかったのではないかと考えています。ただ、今回協力いただいた798件の家庭の子どもたちすべてにそれぞれのストーリーがあることを、回答いただいた方々から改めてお教えいただきました。各家庭の一つ一つの声が、今後の県・市町村の施策の取り組み、民間活動、県民の問題意識につながることを期待します。

報告にあたりまして、研究進行に多大なご心配をおかけしつつも、市町村との連絡調整などの労をいただきました福島県こども未来局 こども・青少年政策課の皆さん、学内での指導をいただきました福島大学研究振興課・行政政策学類支援室の皆さん、そして研究助言を賜りました公益財団法人子どもの貧困対策センター「あすのば」代表理事小河光治様、並びに事務局長の村尾政樹様、公益財団法人日本財団ソーシャルイノベーション本部上席チームリーダー青柳光昌様に感謝申し上げます。

何よりも、今回の聞き取り調査やアンケート配布にご協力いただきました各市町村関係各位、団体、施設の皆様に心より感謝申し上げます。そして、アンケートにご協力いただきましたご家庭の皆様に最大の感謝を申し上げます。ありがとうございました。